30　一七二一年、ボストンにおける天然痘流行と人痘法の施行

小田泰子

人痘法は予防療法の嚆矢であり、Jennerの牛痘法の基礎になった画期的な医療であった。一七世紀以来コンスタンチノープルで行われていた人痘法が、一七二一年にイギリスに伝わり、イギリス王家で人痘法が行われたことはよく知られているが、それと同時期に、ロンドンでの実施を知らずに、アメリカのボストンでも人痘法が行われた。これは一人の牧師がすすめて、一人の医師が実施したのであったが、この実施をめぐる教会と医師会の対立、当時の防疫対策、治療法、医師の考え等に、現在に通じるものを見る。

一七二一年四月、ボストン港に入港した船に天然痘患者が発生した。「船はすぐ海岸を離れ、乗組員の健康状態を報告する」ように指示された。間もなく海岸近くの家に、天然痘患者が一人発生した。患者の部屋には監視がつけられ部屋から出ることを制限された。このような措置にもかかわらず、一か月後にボストン市内に八人の患者が発生した。議会の決議によりSelectmenが行動を開始した。Selectmenの任務は患者の早期発見と隔離である。このようなボストンの迅速な対応は、これまで六回経験した天然痘流行から学んだものであった。しかし、患者は徐々に増えていった。このときボストンの北教会の牧師C. Matherが人痘法の施行を医師に助言した。

Matherが人痘法の存在をはじめて知ったのは、これより約十五年前の一七〇六年で、アフリカ人の奴隷からであった。一七一六年にMatherは、ロイヤル・ソサエティの紀要でTimoniusが行った人痘法に関する報告を読んだ。このときMatherは「もし、私が生きているうちに、天然痘の流行があったら、人痘法を行うように医師に相談しよう」と決心した。

この度の流行が始まって間もなくMatherは、Pylarinusの報告を見た。これは三度目の人痘法との出会いであった。Matherは医師に人痘法を行うように提言した。

これに対して医師、特にW. Douglassが強く反対した。Matherは個人的に、医師Zabdiel Boylstonに呼びかけた。Boylstonは自分の息子と、二人の奴隷に人痘接種を行った。これを知った大衆は人痘法の結果がよくなかったら、Boylstonは殺人者になるとおどした。公聴会が開かれた。ここで、医師Dalhondeが証言台にあがった。Dalhondeは人痘法の歴史からいってあり得ないことであるが、彼がそれまで経験した人痘接種を受けた症例とそれによって死亡した人の剖検所見を詳細に述べた。これは、明らかに偽証である。しかし、この証言を読んだ人々は人痘法に対する嫌悪感を強めた。一方、天然痘の流行は激しさを加えた。人痘法を積極的に推進したMatherではあったが、自分の息子に人痘法を受けさせるのにはためらいがあった。ハーバード大学の学生であった息子は自ら接種を希望し成功した。

人痘法を積極的に推進するMatherらのボストン北教会側と、人痘法は神の教えに反する上に且つ無効であるとする医師会、行政、他派の教会とは激しく対立した。

十一月になって、イギリスから新聞が届き、それにはイギリス宮廷で実施された人痘法が報じられていた。季節は冬に向かい天然痘の流行も下火となり、この争いも次第に終息に向かった。

この流行が始まる前のボストンの人口は約一一、〇〇〇人であった。流行を知ってボストンを去った人がいて、残ったのが一〇、五六七人、そのうち、半数強の五、九八〇人が天然痘に罹り、八九四人が死亡した。人痘法をうけたのは二八〇人で、そのうち六人が死亡した。

ボストンで天然痘流行に際して迅速に取った患者の早期発見と隔離等の防疫対策は正しい対処であった。医師Douglassが、人痘法に反対したのも、評価のまだ定まらない侵襲的な治療法に簡単に飛びつかないという点では、医師としてはむしろ正しい姿勢であったともいえる。ボストンにおける人痘法受け入れに伴って起きた論争の特徴は、多くの場合に、新しい技術（医療）に反対する教会が人痘法を神の教えに反するものではないと推進し、医師会、行政が反対し、権力争いの一武器となったことであった。

（小田眼科医院／東北大学大学院国際文化研究科博士課程後期学生）